メディアとジェンダー表象の現在

早稲田大学 シンポジウム ジェンダー研究所

保守派によるフェミニズムへの攻撃が強まっている。その構造は、今日の社会矛盾や漠然とした不安を"ジェンダー"という語と結びつけることで「ジェンダー・バッシング」を成り立たせているというもの。そこで、雑誌・新聞・テレビなどの影響力に注目し、「メディアとジェンダー表象の現在」をテーマにしたシンポジウムが11月11日、早稲田大学ジェンダー研究所の主催により同大学で開かれ、学生や研究者約100人が参加した。

女性 Women

ジェンダーにまつわる差別の構造にメディアの影響大きい

冒頭、メディア研究が専門の早稲田大学教育学部教授の伊藤守さんは、テレビのニュースに見られるジェンダー表象について、02年に放映された中国製ダイエット食品の健康被害に関する民法2局のニュース映像を流しながら、次のように指摘した。

「共通しているのは、被害に遭った女性の映像をバストショットで、顔を映さずに流していること。報道関係者に確認したところ、人権に配慮して顔を映さないわけではないという。別の民法局のニュース映像では、被害に遭った女性の顔にモザイクをかけていた。通常のテレビのコードからいうと、モザイクをかけるのは"悪い人"。これらのニュース映像では、被害者は"安易にダイエット食品を手にしてしまった女性"として描かれている。

伊藤　守さん

吉田俊実さん

三橋順子さん

宮本有紀さん

◆ダブルバインド状態

一方、NHKのニュースでは、同じ事件を薬害事件として伝えていて、被害に遭った女性も登場しなかったという。

「先に挙げた民法局のニュース映像では、女性の身体の規範化まで踏み込んでいた。番組の最後には、スリムな女性が闊歩(かっぽ)する映像を流し、『安易なダイエット食品には手を出さないことが重要です』というテロップが入った。この番組を通して女性は、イメージ映像のなかで女性はこうあるべきだというメッセージを、また、テロップでダイエットはいけないというメッセージを受け、ダブルバインド(2種類の矛盾した否定的な命令と、さらにその事態から逃げ出してはいけないという命令を受けること)の状況に置かれることになる」と伊藤さんは語った。

「メディアの危機を訴える市民ネットワーク」(メキキ・ネット)事務局で、東京工科大学助教授の吉田俊実さんは、00年の女性国際戦犯法廷を取材したNHKの番組が保守政治家の圧力を受けて改ざんされた事件の経緯を紹介。

NHKの担当者が、NHKと番組制作会社との見解の相違について、制作会社の女性ディレクターの未熟さに責任転嫁する主張をしている点を「NHKの持っているジェンダーバイアス(偏見)の反映」と批判した。

◆差別に無自覚に荷担

早稲田大学ジェンダー研究所客員研究員で、性別越境(トランスジェンダー)の社会文化史の研究をしている三橋順子さんは、性別越境者のテレビメディアでの取り上げられ方について、職業的な性別越境者であるニューハーフを対象にした96年の番組(ニューハーフに手料理を作らせて幼稚園児に判定させる内容)と、性同一性障害の人を紹介した99年の報道番組を比較し、こう解説した。

「前者では、笑い、過剰な女らしさの味付けや下ネタもあるが、明るさがあり、スタジオの後ろにはニューハーフが座っていて、仲間がいることを示している。一方、後者で映し出されるのは病院で、悲壮感、暗さ、苦痛が醸し出されるという、極端な対比がある。また、90年代前半から96年ごろまでは、ニューハーフが登場する番組が多く作られ、性別違和に悩む人の問題は取り上げられず、逆に97年から00年にかけて逆転した」。

報道番組は、「私は趣味でやっているのではありません」という当事者の発言を流して性別越境者を差異化し、キャスターも「女性の真似をしている男性ではなくて、本当の自分を探す戦いを(している人)」とコメントをしている。

三橋さんは、「メディアで病気としての『性同一性障害』ばかりが取り上げられるなかで、性別越境の他のカテゴリーであるニューハーフや女装者との差異化が、医者や当事者といった『病理化』を推進する人々によって意図的になされた。その底辺には、伝統的な水商売蔑視(べっし)や女装は『変態』だという見方がある。メディアがそうした言説を無批判に垂れ流すことで、性別越境の分断、差別化に無自覚に荷担している」と指摘した。

締めくくりに、「週刊金曜日」編集記者の宮本有紀さんが、ジェンダーフリー・バッシング派による集会の妨害、講師への介入、図書排除や言葉狩りが目立つようになった昨今の流れを振り返り、「ジェンダーは、政治・経済・憲法に関するあらゆる社会問題のなかに含まれ、相互に関連している。運動側ではなくバッシング派は、そのことに気づきジェンダーは根源的な問題だという意識を持っている。運動側も個別の社会問題だけでなくジェンダーの問題に関心を持たないと、権力と勝負できない」と語った。

(清水直子)

『社会新報』2006年号12月20日号